

大極殿院の風鐸の検討

—第一次大極殿院の復原研究23—

はじめに 第一次大極殿院において、どのような金具がどの建築に取り付けられていたのか、その実態はあきらかでない。先に整備された朱雀門と第一次大極殿（以下、大極殿とする）の復原研究では、どちらも平城宮の儀式・政務を司る中枢的建築群の重要施設であることから、それ相応の装飾がなされていたものとして建築金具の検討をおこなった。しかし、平城宮内全体でみても金具類の出土例は極めて少なく、そのため、主に奈良時代の寺院の出土遺物や現存事例、史資料をもとに建築金具の種類、取付箇所、意匠等を検討した¹⁾。

第一次大極殿院（以下、大極殿院とする）の復原研究では、建築金具の復原に向けて、古代の建築金具に関する総合的な調査研究を2012年度よりおこなってきた。2014年度にはそれらの成果（途中成果を含む）をふまえて建築金具の復原計画案を策定し、復原する金具の種類と取付箇所を決定するとともに、仕様を暫定的に設定した。2016年度からは建築金具の意匠設計の検討を進めている。

復原する建築金具の1つに、風鐸がある。風鐸は一般に、仏教建築の装飾との認識がある。しかし、朱雀門も大極殿も、上記の建築的位置づけから取り付ける方向で検討され、実際、復原建物にも取り付けられている。大極殿院は、大極殿を区画する建築群であり、大極殿に準じた位置づけができるとして、南門・東西楼に取り付ける方向で検討を進めている。本稿では、これまでの調査研究の経緯を、風鐸に焦点をあてつつ概観し、風鐸を大極殿院ひいては宮殿建築に取り付ける可能性について述べる。

建築金具の調査研究 古代の建築金具に関しておこなった調査研究は、日本国内の出土遺物、現存建築、文献資料、絵画資料の事例調査である。

出土風鐸 近畿圏内の都城・官衙関係、寺院関係、多賀城、大宰府、斎宮および日本全域の国府・国分寺について、建築金具および飾金具の出土事例の集成をおこなった〔58、62、64、65〕（〔 〕内の数字は2010年度以降に所内で開催した「第一次大極殿院復原検討会」の回数を示す。以下同）。風鐸は飛鳥・藤原地域、平城京のほか近畿各地の寺院、国分寺等から出土しており、寺院関係以外では、

大宰府政庁の回廊西南隅から、風招と推定される板状の金具が1点出土している²⁾（図4）。

現存建築の風鐸 現存建築の調査は、飛鳥時代から鎌倉時代前期までの文化財建造物106棟を対象とし、修理工事報告書をもとに金具に関する情報の収集・整理をおこなった。風鐸の事例は、寺院の中でも金堂、本堂、塔婆といった伽藍の中心的建築のほかは、円堂にほぼ限られ、現存する風鐸のほとんどは、後世のもの、ないし復原されたものである〔59〕。

文献資料にみえる風鐸 文献資料の調査は、平安時代以前の成立とされる資財帳をはじめとする文献から、金具関係の用語を含む記述を抽出、収集し、そこから金具の種類ごとに所用建物や取付箇所、寸法等の情報の整理をおこなった。風鐸については所用建物や寸法等、具体的な情報が判明する記述は少なく、寺院の主要な堂、塔婆、門に取り付けられていたことがわかるのみである。

絵画資料にみえる風鐸 絵画資料の調査は、中央公論社発行の『日本の絵巻』、『続日本の絵巻』シリーズ所収の計61の絵巻を参考資料とし、大極殿院復原建築に該当する二重門、楼閣、回廊が描かれている場面对象に、金具に関する情報の収集、整理をおこなった〔59〕。風鐸についてはさらに、建築種別に関わらず風鐸をもつ建築の描かれている場面对象を絞り、同様に情報の収集、整理をおこなった（表1）。該当事例は35例あるが、『年中行事絵巻』や『伴大納言絵詞』に描かれる宮殿建築に風鐸はみられず、ほとんどが寺院建築またはそれに類する建築である。ただし、『玄奘三蔵絵』や『結城合戦絵詞』など、楼閣建築に風鐸が描かれている事例が4例あり、塔婆建築に風鐸が用いられていることとあわせて考えると、多層の建築に風鐸を取り付ける可能性が指摘できる〔64〕。

中国・韓国の事例 大極殿院の復原研究でこれまでに実施した類例調査の資料および収集した宮殿建築等に関する資料から、中国・韓国における風鐸をもつ建築の事例を確認した。現存建築では、中国、韓国とも宮殿の中心的建築にはないが、時代が降るものの中国山西省平遥古城（明代）の城壁上の楼閣や市楼に取り付けられている例がみられる（図5）。そのほか、道教寺院ではあるが、中国山西省晋祠聖母殿（1102年重建）にも風鐸が取り付けられている。ただ、これらについては、日本の現存建

表1 絵画資料における風鐸をもつ建築一覧

建物名称	建物形式	規模	屋根形式	葺材	備考	絵巻名称	絵巻制作年代
1 天王寺 金堂	二重仏堂	5×4(5×2)	入母屋	瓦葺		一遍上人絵伝 巻8(11紙)	鎌倉 正安元年(1299)
2 二尊院 雁塔(雁堂)	二重仏堂	3×3(3×3)	宝形	檜皮葺		法然上人絵伝 巻42(26～27紙)	鎌倉 14世紀前半
3 鉄門	楼門	三間一戸カ (3×2カ)	見えず	見えず	高欄に鈴を吊る 風鐸カ	玄奘三蔵絵 巻3(19紙)	鎌倉 13世紀後半
4 慈恩寺 楼 左廊	楼	3×3(3×3)	宝形	瓦葺		玄奘三蔵絵 巻11(2紙)	鎌倉 13世紀後半
5 大莊嚴園 大楼閣	楼	3×2(3×2)	入母屋	瓦葺	上層軒廻りに鈴カ	華嚴五十五所絵巻 旧友野家藏断簡(3紙)	平安 12世紀前半
6 結城の城 高楼	楼	不明(3×3カ)	寄棟カ	瓦葺		結城合戦絵詞(7紙)	室町 15世紀末
7 阿育王寺 塔	層塔	三間三重塔婆カ	—	瓦葺		東征伝絵巻 巻2(12紙)	鎌倉 永仁6年(1298)
8 国清寺 塔	層塔	八角三重塔婆カ	—	瓦葺		東征伝絵巻 巻2(26紙)	鎌倉 永仁6年(1298)
9 東林寺 塔	層塔	三間三重塔婆カ	—	檜皮葺カ		東征伝絵巻 巻4(3紙)	鎌倉 永仁6年(1298)
10 観世音寺 塔	層塔	三間三重塔婆カ	—	瓦葺		東征伝絵巻 巻4(28紙)	鎌倉 永仁6年(1298)
11 善光寺 五重塔	層塔	三間五重塔婆	—	檜皮葺		一遍上人絵伝 巻1(7紙)	鎌倉 正安元年(1299)
12 天王寺 五重塔	層塔	三間五重塔婆	—	瓦葺		一遍上人絵伝 巻2(9紙)	鎌倉 正安元年(1299)
13 高野山 大塔	多宝塔	五間大塔	—	瓦葺		一遍上人絵伝 巻2(11紙)	鎌倉 正安元年(1299)
14 天王寺 五重塔	層塔	三間五重塔婆カ	—	瓦葺		一遍上人絵伝 巻8(11紙)	鎌倉 正安元年(1299)
15 天王寺 五重塔	層塔	不明	—	瓦葺		一遍上人絵伝 巻9(6紙)	鎌倉 正安元年(1299)
16 叡山横川首楞嚴院 塔	層塔	三間三重塔婆	—	瓦葺		法然上人絵伝 巻9(19紙)	鎌倉 14世紀前半
17 善度城 多宝塔	宝塔	—	—	—		華嚴五十五所絵巻 藤田美術館蔵(5紙)	平安 12世紀前半
18 宝塔	宝塔	—	—	瓦葺		法華経絵巻 畠山記念館蔵(3紙)	鎌倉 13世紀初頭
19 多宝塔(若於樹下)	宝塔	—	—	瓦葺		法華経絵巻 香雪美術館蔵(3紙)	鎌倉 13世紀初頭
20 多宝塔(若於僧房)	宝塔	—	—	瓦葺		法華経絵巻 香雪美術館蔵(3紙)	鎌倉 13世紀初頭
21 多宝塔(若山、谷、広野)	宝塔	—	—	瓦葺		法華経絵巻 香雪美術館蔵(4紙)	鎌倉 13世紀初頭
22 青竜寺 塔	多宝塔	三間多宝塔	—	瓦葺		弘法大師行状絵詞 巻3(32紙)	南北朝
23 久米寺 大塔	多宝塔	七間大塔	—	瓦葺		弘法大師行状絵詞 巻5(20紙)	南北朝
24 高野山 大塔	多宝塔	七間大塔	—	瓦葺		弘法大師行状絵詞 巻7(25紙)	南北朝
25 高野山廟所 多宝塔	宝塔	—	—	檜皮葺		弘法大師行状絵詞 巻11(22紙)	南北朝
26 鞍馬寺 多宝塔	多宝塔	—	—	檜皮葺		融通念仏縁起 上巻(14～15紙)	鎌倉 14世紀初頭
27 祇園 多宝塔	多宝塔	—	—	檜皮葺		融通念仏縁起 上巻(23紙)	鎌倉 14世紀初頭
28 安楽寺カ	本殿	三間社カ	見えず	檜皮葺		松崎天神縁起 巻4(15紙)	鎌倉 応長元年(1311)
29 松崎天神社 塔	層塔	三間三重塔婆カ	—	瓦葺		松崎天神縁起 巻6(15紙)	鎌倉 応長元年(1311)
30 桑実寺 塔	層塔	三間三重塔婆	—	檜皮葺		桑実寺縁起 上巻(5紙)	室町 天文元年(1532)
31 桑実寺 三重塔	層塔	三間三重塔婆	—	瓦葺		桑実寺縁起 下巻(10紙)	室町 天文元年(1532)
32 叡山横川楞嚴三昧院 塔	層塔カ	—	—	瓦葺		天狗草紙 延暦寺巻(27紙)	鎌倉 13世紀末
33 高野山 大塔	多宝塔	—	—	瓦葺		天狗草紙 東寺巻(17紙)	鎌倉 13世紀末
34 円教寺 五重塔	層塔	不明	—	瓦葺		一遍上人絵伝 巻9(11紙)	鎌倉 正安元年(1299)
35 室生寺 塔	層塔カ	—	—	瓦葺		弘法大師行状絵詞 巻9(20紙)	南北朝

()は上層規模

築と同様、風鐸が建物建立当初のものか、いつ頃取り付けられたものか等といった問題を検討する必要がある。また、発掘調査出土事例では、韓国慶州新羅東宮(679年創建)址の月池から金銅風鐸が出土している³⁾。この風鐸は、稀少な宮殿関係の事例ではあるが、具体的な製作年代や所用建物等、不明な点が多い〔64〕。敦煌壁画などの絵画資料では、風鐸のつく建築はほぼすべて仏教建築で、それ以外の建築ではみられない。

まとめ 以上、各調査結果をみると、宮殿建築に確実に風鐸が取り付けられていたといえる事例はなく、風鐸は仏教建築に取り付けるものという可能性は否定できない。しかし、大宰府政庁の出土金具の事例は、官衙の回廊に風鐸を取り付けた可能性を示唆する。また、中国の城邑の楼阁建築、絵巻にみられる風鐸のつく建築の描写の事例は、仏教建築が他の諸建築に影響をおよぼした可能性、楼阁建築に風鐸を取り付けた可能性を示すと考えることもできる。

大極殿院における風鐸の有無の検討は、日本の古代建築における風鐸のもつ性格・機能といった事項を含め、さらなる課題としたい。

註

- 1) 文化財建造物保存技術協会『平城宮朱雀門復原工事の記録』1999。奈文研『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究3 彩色・金具』2010。
- 2) 長岡京右京や恭仁宮でも風招や風鐸の出土例はあるが、

図4 大宰府政庁回廊西南隅出土風招 1:3
九州歴史資料館『大宰府政庁跡』2002



図5 中国山西省平遥古城北城門樓閣

- 前者は包含層からの出土で、後者は山城国分寺跡の出土品とされており、確実に官衙関係の遺構から出土しているものは、大宰府政庁以外みつからない。
- 3) 同所からは仏像の他、仏教関係の遺物も共伴して出土している。